

## 研究ノート「アラハバキ考」

菊地栄吾

研究ノートとは研究論文ほど実証・論証の完成度が高くなく、且つ独創的な知見も不足しているものを言うようです。私的な「ノート」としてご理解下さい。

### 1. 「アラハバキ」の語源

「和田家文書」（「秋田家文書」とも言う）の中に「アラハバキ神」に関する記事が、数えきれない程多くが掲載されております。そして、シュメール文化が発祥とも述べております。

シュメール人は、メソポタミア南部のバビロニアにおいて人類最古の文明を築いた人達であり、一説によるとモンゴロイド系の遊牧民であったとも言われております。周辺にはセム族がおったが、これとは異なる言語・シュメール語を持っていました。

シュメール人が活躍した時代は、BC3500年頃～BC2000年頃にかけての時期で、最初は都市国家を築きます。その後は覇を競いながら統一国家へと発展しますが、BC2000年前後になると異民族の相次ぐ侵入により、シュメール人は歴史の舞台から姿を消してしまいます。

ギルガメッシュ王は、BC2600年頃の伝説的なシュメール初期の王で、古代オリエントにおける最大の英雄と言われています。その英雄譚が『ギルガメッシュ王叙事詩』で、その中には多くの神々が現れ、ギリシャ神話や旧約聖書にも影響を与えておりますが、「アラハバキ神」を見出すことは出来ませんでした。

そこで、シュメール語から入ることを考え、まず飯島紀編著『日本語・セム語族、比較辞典』を手にししました。この本は、日本語・アッカド語・アラム語・ヘブライ語の対照辞典であり、シュメール語は参考として原語は楔型文字で読みはアルファベットで記述されております。

天と地は簡単に見つかりました。天はAN、土地はKIです。ところが、水はAで雨はSURで困りました。そこで、ハバに近い発音の単語を探しました。HUBで「詰め込む」「貯める」という意味の単語がありました。天と地、その間に詰め込んで貯めるもの。それは水であり空気(風)ではないでしょうか。

シュメール人は、BC2000年頃に歴史の舞台から姿を消したと言われておりますが、死滅した訳ではなく地球各地に分散したものと想定されます。そのうち伝承経路は、いろいろあると思われませんがAN・HUB・KI、(アン・ハブ・キ)が日本に渡り、アラハバキになったと考えられます。

太田文雄氏によると、「荒吐の表音は、アラバキ、アラブキ、アラハバキ、アラハブキ、アラフブキなどがあり、後にアラハバキが共通化したようである」と述べており、「アン・ハブ・キ」が原型であったようです。表記にも、荒吐、荒覇吐、荒脛巾、阿羅破婆枳などがあり、現代の日本で、シュメール語が神社の名前として生きております。

### 2. 「アラハバキ神」の伝来

『北鑑』はアラハバキ神の伝来について、次のように述べております。

「不還幾星之祖史」（北鑑第二十五卷）

世にシュメール国のカルデア民族の王ギルガメッシュ俗民信仰を採りて、アラハバキ神を天地水の神として、土版押字に叙事詩を遺して、信仰を度して以来オスマン及びギリシャに渡りて、古代オリエントの神話ぞ、宇宙への天文を擴め、エジプトに渡りてはアメンラア神の巨大遺跡を今に残したり。古代シュメールが滅びても、その信仰はアルタイ、モンゴルに渡りて、吾が丑寅日本の地に至るは三千年前の史實にして、今に尚以て信仰を累代せるものなり。民族をして、その種性を嫌はず、亦、平等撰取の累訓とて吾等民族の信仰に誓ふるは、人をして人の上に人を造らず、亦、人の下に人を造らざる相互救済に民族

をして交はり、天地水の總てを神と奉り、和解し、相睦みてこそ成道とし、子々孫々永代の信仰に保つこそ、吾らは久遠の安住を得るなり。世界に以て信仰の道は、唯一にして全能は神をして他に非らざるなり。天に明暗あり、黄道、赤道ありて十二の星座あり。地なる生々萬物はみな是の化に生死を轉生す。崇むる求道は唯一にして、アラハバキイシカホノリガコカムイぞと稱へ奉るべし。徒らに新興を起こさず、他説、他様の外道に迷はざれば、全能の神アラハバキ神の救済に叶ふなり。此の他、心に他神道に惑ふ者は神の慈悲にその全能を疑ふ者にして自から不救に墮逝くもの也。

元禄十(1697)年七月一日 藤井伊予

この文章はアラハバキ神の神髓を表した名文です。この中には伝来時期は元禄年間より三千年前とあり、すなわちBC1300年頃の縄文後期から晩期にあたります。そして、その頃には複雑な文様・形態を持つ宗教性を帯びた亀岡式土器が東日本から西日本まで流行して行きますが、アラハバキ神社の発祥・伝達と関係がありそうです。

現在でも「アラハバキ神社」と呼ばれる神社は幾つかあり、「荒脛巾神社」として宮城県・多賀城市と大崎市、福島県・会津若松市などに存在します。しかし、その他では「アラハバキ神」ではあるが、神社名がすでに変わっている神社がほとんどです。津軽では「荒磯神社」「洗磯神社」「磯崎神社」などです。そして、東北に多い「山神」はアラハバキの名残とされております。

関東では大宮市に「氷川神社」がありますが、元は「荒波々幾社」で周辺に多くの末社を持ち、いずれも「荒脛社」であったと言われております。さらに多く存在する地区として出雲があります。出雲大社の「一礼四拍」はアラハバキの伝統とも共通し、中国からアラハバキ神と共に伝来した「大元神」もあり、これらの神社では「大元神楽舞・大元神楽式」が神事として行われております。

なお、九州と奈良・京都には「アラハバキ神社」は見当たらないと言われておりますが、本当かどうかは解りません。今後の研究課題です。

### 3. 「アラハバキ神」探索の記

江戸時代には、既に「アラハバキ神」は過去のものになっておりました。その由来・伝承・経緯などについては諸説あるものの確たるものではありませんでした。そこに突然、秋田孝季のところに話が降って湧きました。

(北鑑第四十七卷・二十四)

棚からぼた餅、天地の降りて湧たる如く、老中田沼意次の招く江戸城推参は、案の如くオロシヤ、サガリイに大陸横断の基地をその島に造りて、亜細亜の波紫までも世界を巡見せよとの探索令たり。依て、その従卒は一行十七名とし、その費は三千両と公儀内密令たり。幸いなる哉、安東船来の山艱しるべあり。語辨解書十六国語解書ありけるも、モンゴル書なれば、これを仮名字に書写仕りて誘ふ。時、安永壬辰年(元年:1772)にして、夏七月一日、サガリイ島に至り、黒龍江に登航し、チタに至りぬは九月一日なり。モンゴルに入りてタリムの平原を越え、カブールに至りて、安永乙未年(4年:1775)の年に真夏の八月たり。既にして田沼氏に亜細亜の調書六巻を綴りて、原田早苗氏をエイメンより支那を経て歸したり。

一旦帰国し、再度渡航したとの記録もありますが、其の後、秋田孝季一行はトルコ、アラビア、ギリシャ、イスラエル、エジプト、メソポタミアの巡脚の旅を続けます。田沼氏への報告書は引き続き継続されたようです。

然るに、老中田沼意次は天明六年(1786)に失脚し老中を解任されますが、その翌年になり孝季等の報告書を基に次ぎのように纏めております。

「西山韞古史抄」(北鑑第十卷)

天山は西山韞との境にして、民族多種なり。商、盛んにして多種民の故に鬪争また多し。神を信仰に於いて戦、起こり、その廢處ぞ亦、各處に荒残の跡あり。

古なる傳説多く、諸史の繪画、石刻、あり。神をして裸像多きは女神なり。刻石はやわき故に刻工に易きなり。文字を古事に遺せしは、シュメール国にして古し、凡そ六千年前より創り、今にしては、荒漠たる風砂に埋りし故都をジクラトと曰ふ。

神なる信仰にてはアラ、ハバキにして、その總稱をルガル神とぞ崇拜せむ。此の国なる故事にして、ギルガメシュと曰ふ王あり。宇宙の黄道と赤道に添ふる十二星座を以て、神の法典を説きぬ。是を世にギルガメシュ叙事詩とて土版に記述ありと、地の古老は曰ふなり。住民はチグリス川、ユウフラテス川、の岸に農耕し、マデフーたる葦屋に住みける。川より水利を巡らせる農耕の古きは、古代オリエントの創国六千年前より初まりぬ。

この王国とて興亡ありきも、古代シュメールの先進なる開化は、エスライル、ペルシア、トルコ、ギリシア、エジプト、アルタイ、インド、ローマ、モンゴル、支那、そして吾が丑寅日本に至る、はるかなる信仰の布教ぞ至りぬ。

抑々、神殿の策工なる基、王墓築法はエジプト。更には、はるかにパナマ地峡のマヤ族、アンデスなるインデオ族にも傳へられたり。シュメール文字よりギリシャ文字と相成り、やがてローマ文字とて、今に遺るる基にあるは、古代シュメール土版文字に創まれるものなり。神々の神話になる、その基にオリエントの後代信仰に基せるは、シュメールが信仰になる、ギルガメシュ王叙事詩アラ、ハバキ神、ルガル神の根本より引用せる法典ぞ、キリスト教が用ふる旧約聖書ぞ、アブラハム神、エホバ神にまつはる物語りぞ、是を写せるものにて、ムハマドが用ゆ唯一の神、アッラー、その創むる處はギルガメシュ叙事詩なり。

宇宙に拝む神々の星界、その星座をして暦を知れるも然り、人の智能になる今日を創りたるは、古代シュメールにぞ、発祥地なりと覚つべし。まして、吾が丑寅の古代神、荒覇吐神とて、その直傳を今に蒙むらしめて信仰あり、また今に遺りぬ。

天明丁未年(7年:1787)月日 田沼意次

この記事は、田沼意次の署名になっておりますが、秋田孝季の田沼への報告書そのものであったのか知れません。そして、翌年の天明八年に田沼意次は70歳の生涯を閉じます。

そして、(北斗抄)には「吾ら旅程ぞエジプト、ギリシアを巡礼、シナイより紅海を更に天竺に至り、支那を経て郷里に着きたるは寛政三年(1791)七月成り。」とあります。

偉大なるスポンサーは、三年前に亡くなっており、探索の記録も更には探索旅行があった事実そのものまでもが歴史の闇に消えたようです。

#### 4. 「アラハバキ神」の研究

「和田家文書」が公表される以前から「アラハバキ」に関心を持った人々はおりました。太田文雄氏が「東日流の荒吐神」の中で述べておりますので、その要約を紹介します。

先ず寛政年間に、菅江真澄が遊覧記の中で、津軽、江刺、三河のあらはばき神について書いている。だが、真澄の荒吐神についての考証はしていない。次いで、安政年間に黒川春村が『碩鼠漫筆』の中で荒波婆伎の名義について書いており、神像が二体であると推論している。

明治、大正では『新撰陸奥風土記』などに、荒吐神の社祠が書かれているものがある。昭和になると、中山太郎が「地主神考」の中で荒吐神のことを書いているが、遂に明白にならぬ、と投げだしてしまっている。

また、柳田国男も「武蔵に荒脛巾社という由来不明の小社が数多くある。それは外来の神ではないか、不思議に大社の門神になっている」など、門客神へと探りながらも、結局はわからないとさじを投げている。

他に『大辞典』(平凡社)には、荒脛巾神の荒は接頭語、脛巾をつけた神の意、門客神の異称として、本来地主神であったが、後祀神のために全てを奪われて奥殿から門前へ敬遠された、とある。戦後でも、『日本民俗辞典』(弘文堂)では、門神または客人神で土着の神ではないとしている。

以上のように、これまでも研究はされたが、黒川春村や日本民俗辞典のように中途半端な形で推論するか、中山太郎や柳田国男のようにさじを投げてしまうのであった。ところが、外三郡誌が出てからは全く新しい方向からの研究が始まった。

神道史家の竹内健が古社の研究の中に、「アラハバキ」神の事を知り疑問を抱き調査しているうちに外三郡誌を手にしたのである。これを手に市浦村中心に津軽を訪ね歩き、この調査をもとに「アラハバキ」神の推論考証を綴り「異神巡脚記—(アラハバキ神と津軽伝承)」として纏め、昭和52年(1977)、読売新聞に12回にわたって掲載された。

次いで竹内は、史劇集『津軽夷神異文抄』(絃映社)を出版した。戯曲の中の少年に語らせる形で、自らの推論を展開し、古代採鉱部族、原始修験、白山信仰、蒼前信仰(馬の守護神)などの関連を強調した。また、本格的な研究をすすめるために、東京大学仏教青年会の中に古代信仰研究所(後に、古代信仰研究会に改称)を設立した。しかし、外部発表には慎重であり極めて少ないが、その概要は次のようになっている。

先ず、アラハバキの神名についてである。本来は古代インドのアーラヴィ(アーラヴァカ)族の鬼神乃至は夜叉とされていたアーラヴァカが、仏典の中に取り入れられて「アーラヴァカ・ヤクシア大将」となり、明王部(忿怒部)に分類された。またアーラヴィ族は林住族ともされ、その軍神として「曠野鬼神」ともなっている。

それが、中国に入り道教とも習合し、阿羅婆鬼、大元帥、大元帥大将、大元帥明王、曠野鬼神、城隍神などとなった。日本に入って来て、密教では阿羅婆鬼、大元帥明王、神道では大元神、在野で荒墓、荒脛巾、荒吐、物部氏や登美(鳥見)の一族との関係で、長髓彦などとなっている。

ここまでの、太田文雄氏の「東日流の荒吐神」からの引用ですが、その後、近江雅和氏の『隠された古代—(アラハバキの謎)』『記紀解体—(アラハバキ神と古代史の原像)』や、川崎真治氏の『謎の神・アラハバキ』などが出版されております。

以上の考察により、「アラハバキ神」は世界史の中で論ずられるべき課題であることは言うまでもなく、日本思想史としても重要課題であると考えられます。しかし、それには未解明の問題が山積しております。

#### (参考文献)

- (1) 『シュメル・人類最古の文明』 小林登志子(2005) 中央公論新社
- (2) 『ギルガメシュ叙事詩』 矢島文夫訳(1998) 筑摩書房
- (3) 『日本語・セム語族比較辞典』 飯島紀(2003) 国際語学社
- (4) 『北鑑』(和田家文書) 藤本光幸写本、ネット版
- (5) 『津軽の荒吐神伝承と赤倉信仰(東日流の荒吐神)』 太田文雄(1994) 文芸協会出版
- (6) 『津軽夷神異文抄』 竹内健史(1977) 絃映社
- (7) 『隠された古代—(アラハバキ神の謎)』 近江雅和(1985) 彩流社
- (8) 『記紀解体—(アラハバキ神と古代史の原像)』 近江雅和(1993) 彩流社
- (9) 『謎の神・アラハバキ』 川崎真治(1991) 六興出版